

オールド・ボーイ

2004(平成16)年11月21日鑑賞(ナビオ TOHO ブレックス)

★★★★



第2章

怒り、悲しみ、そして…

監督=パク・チャヌク/出演=チェ・ミンシク/ユ・ジテ/カン・ヘジョン (東芝エンタテインメント配給/2003年韓国映画/120分)

……やっと観た。これはすごい！『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』(00年)、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』(02年)のタランティーノ監督が審査委員長をつとめた2004年のカンヌ国際映画祭で審査員特別大賞を受賞したのも当然と納得。パルムドールの『華氏911』(04年)とは僅差だったとのこと。日本産のコミックを原形としているが、この映画は全く新しい独自のストーリーを創り上げているうえ、俳優陣の演技の迫力は満点。韓国パワー全開の快作で、これではとても普通の日本映画は太刀打ちできないと脱帽！

2004年カンヌ国際映画祭グランプリ受賞！

2004年5月の第57回カンヌ国際映画祭の審査委員長は、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』(00年)、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2』(02年)のタランティーノ監督がつとめた。『キル・ビル』は言うまでもなく復讐物語だし、タランティーノ監督は日本のチャンバラ映画が大好き。

この『オールド・ボーイ』の原作は日本で大きな話題を呼んだコミックで、10年間なぜ監禁されたのか、そしてなぜ釈放されたのかという重いテーマを背負った復讐劇。そして今や世界的ブームとなっている韓流の中、主演はあの『シュリ』(99年)で大注目を集めた演技派、実力派のチェ・ミンシク。タランティーノ監督がこんな映画を気に入らないはずがない。

その結果、この『オールド・ボーイ』は『華氏911』とわずか2票差でパルムドールを逃したものの、見事グランプリ(審査員特別大賞)を受賞することに。パンフレットによれば、タランティーノ監督は本当はパルムドールをこの『オー

ルド・ボーイ』にあげたかったらしいが……？

日本版は10年、韓国版は15年

日本の原作コミックでは監禁された年数は10年。それがこの映画では15年。監禁された理由も、この映画は原作とは全く異なるもの。

「10年ひと昔」というものの、いくら生きても100歳の人間としては、壮年期の10年間というのは貴重なもの。それが更に5年延長(?)されたのだから、その重みは一層強まるはず……。

何の理由もなく突然監禁が開始され、いつ出られるともわからないまま無為の日々を過ごしていくというのは、「つらい」とか「きびしい」とかの形容詞を通りこえるもの。

そんな物語を構想したこの原作はホントにすごいと思うが、それをこんなに見事に映画化したのはもっとすごい！

監禁の理由と釈放の理由は？

この映画のすごいところは、3人の俳優たちの演技のすばらしさを背景としたストーリー展開の面白さと迫力。つまり、だれがなぜオ・デス(チェ・ミンシク)を15年間も監禁したのか、そしてなぜそれを釈放したのか。それがこの映画の大テーマだ。デスは釈放後も常に追跡・監視されていた。そしてこれを監視していたのは、映画開始から約1時間後にはじめてスクリーンに登場するイ・ウジン(ユ・ジテ)。さて、このウジンの人物像は……？

釈放されたデスが入った日本料理の店で知り合った女性は板前のミド(カン・ヘジョン)。デスのことを「おじさん」と呼ぶこのミドとデスが惹かれたあったのはなぜか？そして、この物語の結末は一体どうなるのか？このようなテーマのもとに、この映画は観客の息を抜かせることなく、ずっとスクリーンに集中させる圧倒的迫力を見せつけてくれる。

同じ日の昼間に観た日本映画『海猫』に登場する仲村トオルたちがくり広げる「禁断の恋」物語における、薄っぺらい(?)人物像とは雲泥の差があると感じざるをえなかったが……？

怪物(?) チェ・ミンシクの怪演にビックリ!

この映画の主人公デスを演ずるチェ・ミンシクは、人間の孤独と恐怖、若い女ミドへの愛、敵のウジンへの憎しみ等のあらゆる人間の感情を、極限状態までスクリーン上に示してくれる。また、15年間の監禁室の中での孤独でハードなトレーニングと、釈放後の大勢の敵を相手にした実践的アクションでも、ものすごい演技を見せている。まさに怪物(?) チェ・ミンシクの怪演というべきこの演技には、ただただビックリ!

ユ・ジテのクールな演技にも脱帽!

これに対してユ・ジテ扮するウジンはあくまでクール。15年間もデスを監禁室に閉じ込めたうえ、釈放後もなおデスを観察しコントロールしていくのはなぜなのか、を容易にわからせなくさせているのがこのユ・ジテの演技。心臓のペースメーカーをいつでもリモコンで止めることができるという不気味さの裏返しとしてのこの男のクールさはホントに怖いもの。こんな「同窓生(後輩)」からずっと狙われていたと思うと、思わず背筋が寒くなりそう……?

新人カン・ヘジョンの恐るべき演技

一目見た時から、ちょっと人間離れした(?) デスに惹かれる若い女ミドを演じるのは、300人のオーディションの中から選ばれたという22歳のカン・ヘジョン。最近はやりの韓流ドラマに登場するような美人女性ではなく(失礼?)、かなり個性的な顔立ちの女優だが、それだけに演技力はバツグン! 少しずつデスに惹かれていく若い女性の心理をうまく表現している他、映画の後半ではかなりハードなシーン(?) も堂々とこなしている。もちろん時々見せるヌードシーンも……。

デスとウジンは同窓生(後輩)

映画の前半はこの世のものとも思われなようなシーンが次々とくり広げられて圧倒されるが、後半はちょっと不思議な謎解きゲームのような雰囲気も……。

この映画は、そのストーリーについて「秘密を守れ！」が絶対条件。したがってスタッフ契約書には、映画の結末を公開前に口外したら違約金を科すという条項があったとのこと。そんな衝撃的なストーリーをここでネタばらしするわけにはいかないが、1つだけその大前提となっている事実を説明すれば、それはデスとウジンは高校時代の先輩・後輩の仲だったということ。そこから解き明かされていく事実が、15年間の監禁と釈放後の追跡に見合う(?)だけの「あっと驚く物語」だというわけだ。乞うご期待!

見事なアクション

監禁室の中でデスがやったことは、テレビを観ること以外は身体を鍛えること。それも生半可なものではない。したがって、釈放されたデスには向かうところ敵なしという感じ。1人の例外、すなわちウジンにいつも付き添っている不気味なボディガードを除いては……。

そのデスが金槌1本を持って大勢の敵とわたり合い、これを次々と打ち負かしてしまう長いアクションシーンはこの映画の1つの大きな見せ場だが、デスのその動きは見事なもの。

こぶしにできているマメにもそれなりの説得力があると思ってしまう。さすがに10kg体重を落とし、ボクシングジムに通って習得しただけのことはある。

敵の男の歯を1本ずつ抜くシーン、許しを乞うため犬の真似をして、舐めたりしっぽを振るシーン、さらには自分の舌を自らはさみで切りとるシーンなど、数々のショッキングなシーンを迫真の演技で見せるチェ・ミンシクの役者魂には本当に感服するばかりだ。

15年間の歴史的重みは？

デスが監禁されたのは1988年。しかし監禁室にはテレビがあり、デスはテレビを自由に観ることができた。このためデスは釈放されるまでの15年間における天安門事件、東西ドイツの統合、金大中大統領の就任など世界の大きな動きはすべて知ることができたし、妻の死亡のニュースや韓国の若者たちのヒット曲まで、何から何まですべてテレビという情報源から学び吸収していた。

テレビに映し出される1988年から2003年までの15年間の動きは、それだけでも興味深いものだが、逆にそれだけの時間のロスの重みもすごいもの。それをどう考えればいいのだろうか？

7月5日に秘められたヒミツとは？

この映画の主演はデス、ウジン、ミドの3人だが、それ以外にも興味深い人物がたくさん登場する。第1は、デスが監禁される直前まで一緒にいた幼馴染のジュファン（チ・デハン）。

彼はデスが釈放された後の復讐劇における助手役として重要な役割を果たすが、その彼の行く末は……？

第2は、ウジンの配下にいる監禁部屋管理人のパク（オ・ダルス）や警護室長のハン（キム・ピョンオク）等。彼らはそれぞれのパートにおいて重要な役割を果たしており、その人物像もそれぞれ面白いのでよく観察してほしい。そして第3は、映画後半の「謎解き」において大きな存在となるウジンの姉のイ・スア（ユン・スギョン）。

もっとも、彼女は少女時代の姿しか登場しないし、人物像がややこしいので、その真相解明はかなり難しいが……？

これ以上登場人物の紹介をしているとネタバレになりそうでヤバイのでやめるが、この映画でウジンが監禁の謎を解き明かす期限として設定したのはなぜか7月5日。

はたして7月5日という日にはどんなヒミツが隠されているのだろうか。こんな問題意識を持ってこの映画を観れば、一層興味が湧くと思うが……。決して期待を裏切らない作品であることは私が保証しておこう。

2004(平成16)年11月21日記